

第3回品川区子ども読書活動推進計画策定委員会 議事要旨

日時：令和6年8月29日（木）

場所：品川区役所第二庁舎8階教育委員会室

傍聴者2名

【委員】

出席：島田委員長、米田副委員長、平嶋委員、古里委員、吉田委員、飯作委員、
伊藤委員、鶴田委員、尾上委員、蜂屋委員、柳岡委員、丸山委員

欠席：巻島委員

【事務局】

出席：藤村子ども未来部子ども育成課長、中島保育施設運営課長、
石橋品川保健センター所長、唐澤特別支援教育担当課長、河内品川図書館長

欠席：丸谷教育総合支援センター長

【その他】

品川図書館事業担当 担当者4名、策定支援業務受託事業者 担当者1名

1 開会

2 委員長挨拶

3 議事

(1) アンケート中間報告

(事務局) 資料1を説明。

(委員長) 本日は、(1)～(3)の報告を踏まえて、(4)を説明していただいた後に、
ご意見をいただきたい。

(2) 有識者ヒアリング報告

(事務局) 資料2を説明。

(3) ワークショップ報告

(事務局) 資料3-1、資料3-2を説明。

(4) 計画骨子案の検討

(事務局) 資料4、資料5を説明。

(委員長) まずは順番にご意見をいただいた後に、さらにご意見、ご質問があればおうかがいしたい。

(委員) ワークショップの結果は、納得ができるものだった。その上で私たちに何が
できるのかを考えないといけない。地域で途切れることなくやっていくことが
大切。小学校で終わって、中学校でまたリセットではなく、地域で全体を通し

て、赤ちゃんから大人までできると良い。そこをどうやって、学校図書館や地域が連携できるのか。また、有識者から指摘のあった「不読率が高いことを問題視すべきなのか」という意見が衝撃的だった。不読は悪いというイメージを持ってしまうので、それよりも読書好きを増やすという表現の方が良いのではないか。「本について相談できる人が身近にいる環境」ということで、学校図書室に毎日人がいる環境を作っていただきたいのと同時に、司書の社会的地位を上げていくことも考えていかないと続かないと思う。小学校、中学校の図書館で、優秀な方が長年にわたり勤めるということが、なかなか少ない。公共図書館についても同じだと思う。専門性が求められる割に時給が安い。

(委員) 読んでいない子にどう読ませるのかというのはとても難しい。ワークショップでもあったが、ティーンズボランティアのお薦めやPOPでの紹介等はやってはいるが、なかなか来てもらえない。来ないことが非常に大きな問題。先日、YouTubeで本の紹介をしている若い男性を呼んで講座をしたが、それにはものすごく子どもたちが来た。YouTubeやSNSで紹介するようなことができると良い。なかなか区立図書館のホームページでは展開しにくい。図書館のホームページにそういう情報コーナーや検索ツールを作ったとしても、アクセスしてくれない。入口が区立図書館ホームページだとアクセスしない。情報ツールを使って図書館に引っ張り込むことを本気で考えた方が良い。来ないことには、いくら良い本を並べても、意味がない。どう図書館に子どもたちを近づけるかの視点が必要。区役所が従来ではやらないような、思い切った展開がないと難しいと思う。読書が好きの子をもっと増やす方が良い。

(委員) 小6の男の子がいるが、この夏休みに読書感想文を書くために図書館に行った。何を探して良いのか分からない。本を読みたくて行くのではないので、読書感想文にお薦めの本が並んでいたとしても、貸し出されていなかった場合、ピックアップされたものがなかった場合、次に何を探せば良いのか分からない。図書館のハードルの高さを感じたようだ。体系案の保護者のところ、「読書習慣の定着」というのは、どの程度を想定しているのか。読書感想文で定着なのか、隙間時間に本をパラパラめくることが日常になるのが定着なのか。「子どもの読書活動をより積極的に支援する」ということで、大人が子どもに「本を読みなさい」と発信すると、「なんで」となる。「読みたい本もないし」ということで、余計離れてしまうのではないか。環境づくりをする上で積極的に関わることは必要だと思うが、強くならない言い回しの方が良いと思う。私自身も読書は苦手。家庭の中でも本が近くにあるという環境が少なくなっている。本をペラペラしなくても、ネットでもものを読むことを読書として位置付けるのであれば、不読率も少しは低減するのではないか。

(委員) アンケート調査を見て、小学校では読んでいたが中学生になると本を読まなくなるといのは、まさにうちも同じ。高1の息子は、小4くらいまではとても本を読んでいたが、5年生くらいで周りの子に合わせるために、ゲーム

やスマホを与えると一切本を読まなくなった。3年間くらい全く本を読まなかったが、最近、少しずつ、ネットで本を買ったりして読み始めている。そういう部分がアンケートでも出ていると思った。

荏原五中の図書室には、割と楽しい本が多いらしく、生徒から図書室を開ける時間を増やしてほしいという要望が出た。図書室がある場所が良く、本の表紙を見る機会が多い。本の表紙を見ると、読んでみたくなるのだろうと思った。図書館だが、娘が夏休みに宿題をしに行ったら、利用者に怒られたようだ。「図書館は、宿題をする所ではない。本を読む場所だ」と。子どもたちがばーっと行ったらうるさいし、本を集中して読めないの、それにも一理あるとは思いますが。図書館がダメだったので、大崎の蔦屋に行った。多くの人が使っている。図書館に行って本を見る機会、コーヒーでなくても、例えば夏休みの宿題のワークショップがあるとか、何らかの楽しいイベントがあれば、図書館にも行くだろうし、ついでに表紙を見て、本を選びたいという思いが出てくるのかなと思った。

(委員) 我が家も親子で図書館を利用している。今、子どもと接する時間がある親が減っていると思う。それがインターネットでの調べにつながっていると思う。夏休みに図書館で実施しているイベントが非常にたくさんある。でも、実際に、それを知っている子がなかなかいない。それは勿体ない。品川区図書館のホームページが非常に見づらい。スマホに対応していないので、子どもが見ても分からない。トップページの情報量が多すぎて、ほしい情報にたどり着かない。行きたいイベントがあっても、更新されてしまうと、いつ実施するのか探せなくなる。渋谷区や荒川区のホームページはカレンダー表示になっていて見やすい。子どもは自分で調べて少し遠い図書館でも、魅力的な図書館があれば行く行動力がある。電車に乗っても行く。イベント情報が分かりやすければ、もっと参加率が上がると思う。また、図書館ホームページだけではなく、子育て応援アプリ「しながわこどもぼけっと」や品川観光協会のアプリと紐づけても良いのではないか。品川区の公園や児童センターは、非常に魅力的。そういう場所で図書館のイベント情報を提示してもらい、来館を促すこともできるのではないか。そのほか、授業の一環で図書館見学があると良い。大崎分館のボランティアが作るPOPが非常に良いので、是非、子どもたちに広めていきたい。

(委員) 中長期的に鍵を握るのは大人だと思う。子どもを本に向かわせる水先案内人は、保護者や大人だと思う。こういうところの揺り起こしに、今後、公立図書館がパイプ役を果たす必要がある。アンケートのP9、読む本をどう選ぶかについては、4つ目に友達が進める本を選ぶ、5つ目に家にある、家族の本を選ぶとある。実は本に触れるきっかけは素朴なところにある。大学生ワークショップの3ページでは、読む環境が整っていないと示されている。そもそも周囲に本を読む人がいない場合もある。有識者ヒアリングの5ページでは、

「ターゲットは子どもかもしれないが大人が重要な鍵を握っている」や「そもそも大人が読まない状況で、子どもに本を読めと言っても読まない」とある。これらはすべて連動している。保護者により本を読ませるための施策も必要だと思う。そうしないと、根本にたどり着かないような大きな課題があると思う。鍵を握るのは保護者や大人。体系案の保護者のところ、「家庭における子どもの読書習慣の定着の大切さをさらに理解する」の主語は、保護者なのか、品川区なのか。

(事務局) 両方である。

(委員) 大人が、本を読むとかっこいいと子どもに思わせることが大切。アンケートの4ページ、本を読まなかった理由では「読みたい本がなかった」や「どの本が面白いかわからない」とある。子どもたちは本を読みたいが、読みたい本に出会うきっかけがないということではないか。いろいろなきっかけづくりが必要だが、その中の1つとして、大人が本を読む姿を見せたり、親子で図書館に行ったりするとか、それを必ずやるというような強制力があるものを入れないとダメなのではないか。子どもたちが本を読むようにすることは、学校に任せれば良いという節もある。大学生ワークショップの3ページ、「ある程度、学校等で本を読む時間を作ることで、読書に触れるきっかけになる」とある。子どもたちには、本を読むことについて、程よい強制力があって、自分たちの興味・関心がある本に手軽に出会えるような図書館があると良いのではと思う。中高生と大学生のワークショップで出されている興味深い意見は、やってほしいということの表れなのではないか。

(委員) 朝読書だけではなく、全クラスでブックトークをしてもらっていて、図書委員に自分のクラスに置きたい本を選ばせ、各クラスに置いている。また、国語科の指導をした上で、全員でちょっとは本を読み、POP作成に挑戦してもらった。夏休みの宿題にもなった。新しい試みとして、文芸部が文学散歩として、森鷗外の記念館に行くことになり、そこまでの行き方や作品を調べたりして、実際に行った感想を書いてもらった。いろいろな試みをしている。キャンドゥに文豪シリーズのキーホルダーがあるらしく、それを掲示したりとか。いろいろなきっかけづくりをしている。いろいろなレベルの子どもがいる。少し心がすさんできたときにホッとできる本を広げることができるが良いと思い、取り組んでいる。体系案で、不読率はもっと優しい言葉にした方が良い。また、目的の「豊かな感性と思いやりの心を育み」のところ、豊かな感性は必要だが、「思いやりの心」は、今、いじめの問題もあるから出てきたのかとも捉えた。「思いやりの心」は必要なのか。目標3の「多様な人々とつながり」はとても大事なことだと思う。ただ、これと読書をどういう風につなげていくのか。学校でも、自分の良さをしっかり認識し、それを社会の中で活かし、人の輪の中で頑張りなさいと言っている。孤立するのではなく、周りの人と手をつないで、その中で生きていってほしいと思う。なので、目標3は非常

に良いと思うが、読書とどうつながるのか。読書の中で様々な生き方を学び、そこからという意味だとは思いますが、少し捉えにくいと思う。

(委員) 3点ある。1点目、読書環境をつくること。読書を通して人とのかわりをどう作っていくのかがポイントになる。読書自体は自己との対話だが、ブックトーク等から、自分自身の本を読んだ感想や考えを皆さんと共有したいという思いが強いのではないか。アンケートでも、本を読んでいた子たちが、高校生になってどうなるかという、SNS等で自分の意見を発信したり、他者の考えに触れたりしていると感じる。読書を通して、自分自身で考えたことを他の人共有していく場を作ることが、すごく大事なことだと思う。いまどきの子は、「あなたの好きなものは何ですか」ときくと、「なんだろう」と戸惑ってしまうが、「あなたの推しは何ですか」ときくと、滔々と語り始める。不思議。そういうようなところから、子どもたちが、自分が良いと思うものを誰かと共有したいという思いを、上手に使えると良いのではないか。様々なやられている取組みを上手に活用して、人とどうつながっていくか、共有していくかというところがポイントなのかなと、皆さんのご意見をうかがっていて思った。2点目、体系案の目標3だが、文言自体は非常に素晴らしいと思うが、読書とどうつながるのか。品川区の図書館として、この3番の目標を達成するために、何ができるのか。それを考えたときに、この目標は大きすぎるのではないかと思った。もう少しコンパクトにして、図書館が、本を通して、人と人をつなぐハブになるような存在だと良いのではないか。そのレベルなら、目標として達成するためにやりたいことも明確になるのではないかと思った。3点目、大人が読まない、なかなか子どもたちに本の良さを伝えることができない。3年間在籍した中学校では、ざっくりと数えただけで、60冊分のPOPを書いて校長室の前に自分が読んだ本と一緒に掲示をした。最後の方には、「この本を貸してもらって良いですか」と言い出してくれる子どもがいて、貸し出すことができた。今の学校では、ラーニングセンターで先生方の推し本を掲示している。そういう子どもとの関わりを、大人がどう作っていくのか。それが、家庭であったり、学校であったり、図書館であったり、いろいろな場で作っていくことが大事。やはり図書館が、人との関わりを作れる場だと面白いと思う。

(委員) 皆さんのご意見にそうだなと思った。安心して、気軽に行けることが、図書館を身近に感じるポイントだと思う。安心できないとじっくり本を読むことができない。今の図書館では、カフェが併設されているところや、赤ちゃんが遊べる場所があるところ、高齢の方がくつろげるところもある。なので、読書環境ということ全体を皆で考えていくと、もっと豊かになると思う。大学生ワークショップの報告書が、非常に興味深い。「マンガをきっかけに関連する本を置いておくのが良いのではないか」というところ。読んでいる本の1位がマンガだが、上の世代のマンガのイメージだと「マンガを読んでいないで、勉強し

なさい」という感じだったが、今は全く違う。マンガをきっかけに映画化されるものもあるし、知らなかった世界に触れることもできる。そういう意味では、図書館にマンガも置いていただいていることは、非常に大きいと思う。マンガを含めて読み物に触れるとか、何かをきっかけにして自分が好きな本に出会えることも大切。心が動くとか誰かに伝えたい。いろいろなところできっかけづくりができると良い。学校でも、家庭でも、地域全体で、大人と子どもと本が出会うことができ、人とのつながりもでき、自分自身の心も豊かになっていく場が大切。どのように具現化していくのかを皆さんと考えていくと、よりフィットした目標になると思う。

(委員) 質問だが、中高生ワークショップの参加者は、そもそもどうしてボランティアになろうと思ったのか。どういう生徒さんなのか。

(事務局) 図書館で働きたいという子どもが多いと思う。夏休みに1日図書館員を募集するが、非常に高い倍率になる。将来、司書になりたいという子どももいる。

(委員) どういう形でボランティアされているのかに興味をもった。自分の将来を見据えての動機も多分にあることが分かった。いずれ司書になる方もいるかもしれないので、今の段階での子どもたちの意見を今後少しでも具現化できると良い。皆さんのお話をうかがっていて、施設のあり方・作り方というのは、今後、どう作っていくのかというところ、図書館と周辺の施設、一体型かもしれないが、そのあたりの作りこみ、あり方は非常に大事だと思う。また、夏休みの宿題のために図書館に行くお子さんもいるということなので、本屋さんであれば課題図書でも売れば補充すれば良いだけだが、一般の図書館の本だと、他の人が借りるとその本は欠品状態になるので、その後、別の本を紹介しながら補充できると良い。そういうあり方が大切だと思う。思ってもいない本に触れられると良い。体系案では、対象別目標で、現段階では保護者のみになっているが、あえて保護者に限定するのか、それとももう少し枠を広げるのか、そのあたりは検討の余地がある。

(委員) アンケート結果をそうだよなと思いながら見た。読まない理由が電子側に寄るのは時代の流れだと思う。これだけ様々なメディアが出てきて、向こうから情報がやってくる時代。その状況で、自分から活字を読みに行く前に、様々なハードル、魅惑がある。そこに向かうのは、本当に難しい。それを考えると、これまでにない道を提示しなければいけない。活字を読んで、文学作品を味わって楽しむようなどころに行くためには、多くのハードルを乗り越える必要がある。いきなりそこには行けないので、そこに向かうための仕掛けが大切。そこでデジタル機器を有効活用することが必要だと思う。アンケートの結果では、電子書籍を読んだことがない人が多く、しながわ電子図書館が知られていない。そこをどう有効活用するのか。他の品川区のアプリとの連携も必要だと思う。校長先生に質問だが、品川区の電子書籍を使って朝読書はできないのか。読書が紙でないとダメという訳ではない。あと、大人がどう振る舞うのかは大切に

なるので、子ども読書と言いつつも、そこに関連するという意味で、大人に対するアプローチも考えていく必要がある。体系案については、視点や目標で使われている言葉のレベル感の違いが気になった。視点でいえば、「子どもの主体的な読書活動の推進」とあり、その上に「読書環境の整備」とあるが、「子どもの主体的な読書活動の推進」のために「読書環境の整備」をするのだと思う、そのあたり、もう少しレベル感を合わせられると良い。

(委員) 視点のところ、「読書環境の整備」の下の言葉が、「何かな、これ」と思う。「読書環境の整備」の代表的なものを挙げているのか。真ん中のところ(支援や特別な配慮を必要とする子どもたちへの対応)は、この計画の中でこれまでになかったもの。その上の「本について相談できる人が身近にいる環境」というのは、レベルが全く違うと思う。視点の中にサブの視点を設けるのであれば、中身は体系につながるものにするか、思い切って本を好きな子どもたちを増やすことにする。「子どもの主体的な読書活動の推進」は具体的にどういうことなのか。もう少し具体的にした方が良い。気持ちは分かるが、上から押しつけている感じがする。こういう書き方で良いのかと思う。

(委員長) 視点のところは、内容も含めてあらためて検討していただきたい。

(委員) 児童センターにティーンズ館があるように、図書館にもティーンズ館があっても良い。そこでは、読書だけではなく、学習コーナーがあったり、子どもたちが企画したイベントスペースがあったりしても良い。お金のことも考えると、長期的な視点になるが、そうした長期的な視点ももっておくべきだと思う。単独館も必要だが、いろいろなところと連携することも必要。例えば、児童センターの中に図書館のティーンズ館が入るとか。ちょっとした連携、多様性という視点でも、館として待っているだけではなく、違うやり方を考えないといけないのではと思う。地域の中で活動をする中で、うちでも何百冊か絵本を持っており、時折、まちのイベント等で「絵本を貸してほしい」と言われることがある。ただ、破損や運搬等を考えると、なかなか「はい」とは言えない。それについては、「公共図書館に相談してはどうか」と言ったこともある。そういうことも公共図書館のできるのであれば、もっと本を手にする場所が増えるのではないか。

(委員) 絵本の貸出へのニーズは高いが、破損や運搬手段等を考えると対応が難しい。それこそ、電子の時代だからこそ、公共図書館ができることなのではないか。

(委員) 体系案で「本を読むことに困難さがある」という表現を、「配慮を要する」とかにできないか。誤解を招かないと良い。

(委員) 不読率を含めて、全体的にネガティブなキーワードをどうポジティブに言い換えられるか。「本を読むことに困難さがある」ではなく、「すべての人たちが楽しく本を読めるように」でも良いと思う。表現の仕方、受け取り方の部分は非常に重要。

(委員) 体系案の「生活環境が厳しい子ども」について、貧困やヤングケアラーから脱

する術を、本を読むことで解決するというように狭義に捉えてしまう。もしかしたら、それだけではなく、貧困やヤングケアラーではあるが、本が身近にあったり、本に気軽に接することができることを、どう支援していくのかなのではないだろうか。

- (委員) 視点の置き方をどこにするのかがポイント。読書、読者の立ち位置を考えると、表現も考えていかなければならない。非常に難しい。
- (委員) 社会問題を敢えて入れただけの印象がする。貧困やヤングケアラーの子どもに、本を読むことの困難さがあるのか。図書館なら、ただで本を読むことはできるし。
- (委員) 大切な視点で、できることがあればやりたいということだろうが、具体的に何をするのか。
- (委員) 前回も言ったが、非常に大きく広げているので大丈夫なのかと思う。公共図書館として、右端（本を読むことに困難さがある子ども）については、区の施策としてチャレンジすることは良いことだが、「本を読むことに困難さがある子ども」というくり方もそうだし、「生活環境が厳しい子ども」というくり方も問題。もう少し練った方が良い。3つの要素をターゲットにしたいという気持ちは分かるので、これをどう表現したら、計画の中で分かりやすい言葉としてできるのか。将来の目標にしても、今の問題意識をもちながら、図書館の児童サービスをやっていく際のベースにこの考え方を置くというのであれば、もう少し言葉を練る必要がある。視点も同様。
- (委員) 体系案の「乳幼児期」のところ、「子守唄」や「わらべうた」を聞いて育ち、おひぎの上でふれあいながらを、「子守唄」や「わらべうた」を聞くなど、保護者や安心できる人とふれあいながらに変更していただきたい。「おひぎの上で」と限定されてしまうと、ハードルが高い。
- (委員) 0歳や1歳から保育園で見てもらっている方がすごく増えていて、家で寝かすときに本を読むというのはなかなか難しい。
- (委員) 本当は、お父さん、お母さんのイメージだと思うが、「保護者や安心できる人」であれば、保育士や近所の人も含まれる。
- (委員長) 非常に貴重なご意見をいただいた。これらのご意見を体系案に入れ込めれば良い。

(5) その他
(特になし)

4 連絡事項

第4回策定委員会は、令和6年9月27日（金）14～16時を予定している。

5 閉会